

『顯淨土真実教行証文類』所引の『弁正論』諸本校訂

藤 場 俊 基

一、『顯淨土真実教行証文類』所引の『弁正論』の所本校訂の意味

『顯淨土真実教行証文類』（以下『教行信証』と略す）の記述は極めて特徴的で、特に著者親鸞自身によって施された訓や返点は、他に例を見られない独自なものである場合がある。このような特徴は、訓・点の比較検討という方法をとることによって、著者の強調した意図を推測することとある程度まで可能にする。

訓・点の比較検討という方法によって『教行信証』領解におけるすべての問題が解決するわけではない。しかし、著者自身によって訓・点が施された漢文著述としての『教行信証』において、それぞれの文類について著者以外によ

る訓・点と比較することは、そこに表わされた思想の特徴をうかがう上で極めて有効であるのみならず、漢文に関する知的背景がまったく異なる現代人が、その不足を補うための補助的手段として欠くことのできない重要な方法であると言える。

このような方法を用いる場合、対校に用いるテキストの状態が良好、すなわち様々なテキストの間の異同が少ない場合問題は少ないが、そうでない場合は困難がともなう。後者の典型的な例として、本論で取り上げる『弁正論』がある。

『教行信証』に引用されている『弁正論』の記述の問題点については、存覚の『六要抄』をはじめとして、すでに多く指摘されている。特に、武内義雄氏の「教行信証所引

弁正論に就いて」(『大谷学報』12巻1号所収、一九三一年)と題された論文は、老子・道教の研究者としての見地から、当該部分の記述の問題点に焦点を当てた研究として注目すべきものである。

『教行信証』所引の『弁正論』においては、現在参照することができる諸テキストの記述と異なる部分は異例ともいえる頻度で見られる。量的に多いだけではなく、親鸞による文字の差し替えや訓み換えが行なわれている部分の特定は極めて困難である。その最も大きな理由は、親鸞が『弁正論』を書写する際に用いたテキストの原型を推定することができないことである。

詳細は後述するが、現在までに確認することができた『弁正論』の様々なテキストや、『教行信証』とほぼ同じ部分が引用されている道宣の『広弘明集』のテキストのどれを取り上げて比較しても、『教行信証』と完全に、あるいは相当程度一致するものを見出すことはできない。そればかりではなく諸テキスト相互の比較においても異同が目立ち、『弁正論』の伝承過程で異なった変遷をたどったいくつかの系統が生じたものと推測される。

『教行信証』と諸テキストとの対比においては、記述の一致・不一致の部分が交錯しており、いずれのテキストに、

より近似しているという判定も困難である。また、『教行信証』の記述が諸テキストのいずれとも一致しない部分も多く、『教行信証』の記述の正誤の判定、あるいは親鸞の意図の介在の推測をより困難にしている。もしそれらのすべてが明確な意図のもとに書写されたものでないとするならば、親鸞依用のテキストは相当粗雑なものであったか、あるいは従来言われているように、何らかの事情により、この部分に限って特に写誤が多くなったと考えざるをえない。

しかし、従来写誤とされてきた字句においても、右訓や左訓が施されているなどのいわゆる「注意喚起」がなされていることから考えても、過失や不可抗力としてすまされない、親鸞があえて依用本の原型を改変したと考えられる部分があることもまた否定できない。

このような状況にある『教行信証』所引の『弁正論』の記述を、できるだけ正確に領解しようとするならば、混乱しているとされる部分が、不注意あるいは不可抗力によるものであるのか、意図的改変であるのかを識別することが不可欠となる。

『教行信証』の記述と諸大蔵経所収の『弁正論』や『広弘明集』などのその他様々なテキストを比較した時に、記

述が一致しない場合次のようなケースを想定しなければならない。

①対照・比較に用いるテキストの『弁正論』や『広弘明集』が何らかの理由（誤植、誤写等）で誤っている

『弁正論』の伝承過程において、様々な版・写本が成立した可能性は否定できない。テキストの相互不一致には内容に関わるものもあるが、単純なミスによると思われるものも少なくない。

②無視し得る相違

テキストによって様々な略字・俗字・異体字が用いられている。字形が異なっても意味が同じ場合はさほど問題はない。また、本来は別の意味をもつ字であっても、版の翻刻上の理由などで、形が似ている異なった字が用いられていることがあるが、それらの中には解釈上特に問題がないと判断できる場合もある。

③親鸞依用本自体の問題

『教行信証』所引の『弁正論』には説明のつかない「異字・脱字」等が非常に多い。しかし、親鸞が『弁正論』の筆写の時だけことさらに注意散漫になったとは考えにくい。また従来は弟子などの別筆説や、「老耄」説によって説明しようと試みられているが、いずれも

根拠が弱い。筆記者である親鸞の過失であると判断するよりも、不可抗力、すなわち様々な伝承系統があったことは疑う余地のない『弁正論』に、間違いの多いテキストがあったと考えるほうがより現実に即しているように思われる。

④親鸞の写誤（過失）

写誤の可能性を完全に否定することもできない。過失・不可抗力いずれにしても依用本が特定できない以上断定することは難しい。

⑤親鸞の意図的な改変

独自の訓み換え、左右の訓など、親鸞による注意喚起あるいは強調などの意図の介在を示していると判断できる部分は少なくない。

⑥弟子による別筆説（筆記者の過失）

近代書誌学の諸研究の成果によれば、当該部分は親鸞の自筆、しかも『教行信証』執筆初期の筆跡とする説が有力であり、その見解を支持するので、別筆説は除外して考える。また別筆と仮定しても、それだけでは異例なまでの写誤の多さの理由とはならない。

⑦後人の加筆

補記部分などに、一部別筆の疑いが残るものもある。

紙幅の都合上、今は一々の相違点についての詳述はできないが、『教行信証』所引の『弁正論』の解説にあたってはそれぞれの相違についての検討をし、親鸞が注意喚起している部分や意図的な改変を行っている部分を特定した上で、それらの意味・意図を読み取る必要がある。

二、諸本テキストの特徴

『弁正論』および『広弘明集』の諸テキストの『教行信証』引用部分について対照したものが添付資料である。それぞれのテキストの特徴について簡単にふれておきたい。

(1) 宋磧砂藏経（磧砂版と略す）

今回の校訂には宋版大藏経をもとにして開版された磧砂藏経を用いた。縮刷藏経の頭注（縮藏注と略す）及び大正大藏経の脚注（大注と略す）には底本の高麗版と宋版・元版・明版の三本との校訂が記されているが、それらの注記を参照すると磧砂版には誤字も見られ、完全に宋版と一致しているとは言えない。しかし、意味に関わる大きな相違はなく、『弁正論』の校訂については、磧砂版によることによって基本的な誤りが生じることはないといえよう。

(2) 明版大藏経（明版と略す）

明版は磧砂版との類似性が高く、編纂上の特徴が多少異

なる点を除けば、相違の大部分は文字の違いで、しかも形状の類似による誤謬と判断して差し支えないものか、単純な間違い、または略字・俗字などの字体の違い程度で、基本的な意味に大きな違いが出るようなものはほとんどない。したがってこの両者の底本はまったく同一とは言えないが、おそらくかなり近い同系統のものであろう。ただし、『定本親鸞聖人全集』第一巻（定本と略す）三七二頁6行から三七二頁2行（大正蔵五二卷五三〇頁b・c）にわたって引用されている「自漢一靈哉」の部分が置かれている位置が非常に異なる。

(3) 高麗版大藏経・大正大藏経（それぞれ高麗版・大正蔵と略す）

大正蔵の底本は高麗版であり、したがって両者の類似性は極めて高い。ただし注記の扱い、翻刻の相違によると思われる字体の違いが若干見られる。その他単純な過失によると思われる間違いが散見される。（以下特に言及がない場合は大正蔵は高麗版と同じ）

高麗版と磧砂版・明版とを比較した場合、文字の相違、字句の出入等において内容にまで関わる相違が多く見られ、高麗版の源流は明らかに磧砂版や明版のそれとは異なっていると考えなければならない。

『教行信証』と高麗版のみが一致する特異な類似点があり多く見られるが、他のどの本とも一致しない高麗版にのみ特異な不一致も相当数見られ、親鸞依用本が高麗版と同じ系譜にあると断定することはできない。

(4) 大正大藏經所収『広弘明集』（『広弘明集』と略す）

『広弘明集』には『弁正論』の「十喻篇」「九箴篇」が引用されている。したがって、かなりの範囲で『教行信証』の引用と重複するが、定本三七五頁2行（大正蔵五二卷五四六頁c）以降について『広弘明集』は引用していない。

『広弘明集』三十巻は道宣の撰述で、『弁正論』の著者法琳の死後四年の六四四（麟徳元）年に成立している。また『弁正論』の成立は六二六（武徳九）年であり、この両著は極めて近い時期に成立している。しかも『広弘明集』の諸テキスト相互の異同は、『弁正論』の場合に比較して、はるかに少なく、成立初期の原型から『弁正論』ほどの大きな変遷はないといえる。したがって『広弘明集』は『弁正論』のテキスト校合のための有力な資料の一つとして利用できる。しかし、『広弘明集』の引用範囲が『教行信証』より狭いことから、親鸞が『広弘明集』を依用したとは考えられない。また、『広弘明集』が他のテキスト以上に特

に『教行信証』と近似性があるとも言い難い。

『広弘明集』は、比較対照に用いた『弁正論』のいずれのテキストとも特に際立った近似性があるとは言えないため、磧砂版・明版系と高麗版系の二系統の他に、『広弘明集』の著者道宣が見た別系統の本が存在した可能性も考えておく必要がある。（一九八九・七・一七筆了）

【校訂表の凡例】

定 定本親鸞聖人全集 第一巻（法蔵館）

磧 宋磧砂藏經 「明」帙

明 明版大藏經 「旦」帙

麗 高麗大藏經 第三十三卷（一九七五年十一月二十

日 東国大学校発行）

因 大正大藏經 第五十二巻

大注 同脚注（宋・元・明の三本校訂）

弘 大正大藏經 第五十二巻所収『広弘明集』

弘注 同脚注（宋・元・明の三本校訂）

磧弘 宋磧砂藏經 「明」帙所収『広弘明集』（弘と

異なる場合などに参照）

縮 縮刷藏經頭注 「露」帙（高麗版を底本とし、

宋・元・明の三本校訂）

因 同頭注による宋版藏經

元 同頭注による元版藏經

坂 同「顯淨土真実教行証文類」(コロタタイプ版 親

鸞聖人真蹟集成 第二卷 法藏館)

西 同 西本願寺所藏本(コロタイプ版 大正十二年一月 西本願寺発行)

専 同「専修寺本・顯淨土真実教行証文類」下卷(コロタイプ版 法藏館)

六 六要鈔(真宗聖教全書 第二卷)

恵 同慧空写本『弁正論』(大谷大学図書館所蔵)

「朱」は朱注(宋藏經との校合)、「墨」は墨注(広弘明集との校合)

訥 同武内義雄「教行信証所引弁正論に就いて」

(『大谷学報』第12卷1号)

勸 同「教行信証 化身土卷末解説」(『現代教学』第

10・11号 真宗教学研究会東京分室)

【表の見方】

1 因・國・因 因が空欄の場合は積砂版と同じ

2 因欄の「×」は國との、因欄の「×」は國との不一致の項目

3 「●」は欠字の意

4 「★因」は「定本と同じ」の意

5 行欄の「a・b」は細注の右左を表す

6 俗字・略字については一部省略

教行証文類所引『弁正論』諸本校訂

(明・國・因・國の空欄は同國)

定本頁	行	定本	宋磧砂藏經	明版大藏經	高麗版大藏經	大正大藏經	因弘明集	備考
三六〇	9	十喻九箴篇●●	十喻●●篇第五				十喻九箴篇 釈法琳行十喻篇上	國箴に「イマシム」篇に「ツラヌ」の左訓
9	9	李	傳				★國 ●● ●● ●●	國李に「リ」の右訓「モ、」の左訓
9	9	十異九述	十異●●				十異論●● ●● ●●	國述に「シュツ」の右訓「ノフ」の左訓。因唐本為迷
10	10	述●●外乃至なし	有74字		有86字	同國	有76字 ●● ●●	國・國・國とも序文
三六一	1	●太(行改)	注太(段下げ)	●太(細注)×		注太(行改)×	★國 ●● ●●	國弘の注の扱いは同様につき以下省略
1	1	子	上					因唐本為上、上字宜歟
1	1	割	割					國割に「ヒラキ」の右訓・送り。國三六七―3割に「ヒライテ」の右訓
2	2	邪	耶					邪は耶の俗字(以下省略)
2	2	乃至	(無省略)					因当段所引非有殘文、是全文也。國改頁有り
6	6	●解	集解					國解に「カイ」の右訓

				三六二							
4	4	2	2	1	10	10	10	9	8	7	7
耳	盲	録	也● 仙	李	王札	胎	檢(手偏)	君●	民●	類●	老
乎	妄	籙(竹冠)	★ 園	★ 園	玉扎 園 劓	台	檢(木偏)	★ 園	民之	★ 園	考
					玉劓						
					×						
★ 園			也按 仙		玉机		★ 園	君上		類疏	
★ 園			同 園		同 園					疏	
							×	×		×	
				理 廣弘	玉札 廣弘		★ 園 廣弘 檢				
園耳に「ミト」の送り。園三本俱作乎 大注。園墨「乎イ」	園盲に「ワウノ」訓送り「メシヒ」の左訓	園録に「ロクニ」の右訓・送り「シルス」の左訓。籙は書物記録		園李に「リ」の右訓	園三本俱作劓。大注宋元 扎、明 劓。内玉札が是、形誤	内中胎経を指す故に台は誤り	園檢に「ニ」の送り「カフカフル」の左訓。檢は檢に通ず		園民に「ノ」の送り		内園のみ不誤

教行証文類所引「弁正論」諸本校訂

定本頁	三六二	8	9	10	三六三	1	1	1	1	3	4
行	上	●老(行改)	蜀	喩	●伯(行改)	楊	職	恭	太	浮●	
定本	士	注老(段下げ)	蜀	★園	注伯(段下げ)	陽	職	忝	天 困 大	浮之	
宋磧砂藏經		●老(細注) ×		異 ×	●伯(細注) ×				★園 ×		
明版大藏經			★園		注伯(行改)		★園		★園		
高麗版大藏經		注老(細注) ×	×		注伯(細注) ×		×		★園		
大正大藏經		★園			★園				★園 磧弘		
因広弘明集											
備考				園無注。大注明 異	園楊に「ヤウハ」の右訓。忝形誤	園職に「シヨク」の右訓「ツカサ」の左訓。職の俗字	園泰に作る、園の誤植。園恭に「カタシケナク」の右訓・送り	園宋元俱作大。大注元 天	園浮に「ノ」の送り		

							三六四				
7	7	5	5	4	3	2	1	10	10	6	6
始	●老 (行改)	載	●●周初	騎	出	●昭	出	景王	●迦 (行改)	于	●老 (行改)
所	注老 (段下げ)	載	若在周初	聘	★園	應昭	★園	景正 園無注	注迦 (段下げ)	★園	注老 (段下げ)
	●老 (細注) ×	★園 ×						★園 ×	●迦 (細注) ×		●老 (細注) ×
		★園		騎			生	★園			
	注老 (細注) ×	★園		×			同園	★園	注迦 (細注) ×		注老 (細注) ×
	★園	★園 破弘			生 破弘 出	★園 破弘		★園 破弘	★園	乎 破弘	★園
團墨「始イ」		園載に「フセ」の右訓。園元作載。 大注宋元 載	訓下し異。訛意義不通、加点的誤り	園騎に「サンヲ」の右訓・送り。聘 (タン)の異体字か。(以下省略)	園出に「タマヘリ」の送り。 注三 本 出		園三本俱作出 大注	園無注			

教行証文類所引『弁正論』諸本校訂

5	5	4	4・6	2	三六五	10	10	8	三六四	定本頁
怪	𪛗	焉	佚	鵠	慈	佚	●老 (行改)	捉	子	行
恠	號	及	★ 園	鵠	茲	★ 園	注老 (段下げ)	槌	★ 園	定本
★ 園 ×							●老 (細注)		于 ×	宋碩砂藏經
	𪛗	★ 園	佚	★ 園		矢				明版大藏經
★ 園 ×	×	★ 園	同 園	★ 園		同 園	注老 (細注) ×			高麗版大藏經
★ 園 碩弘		之 碩弘					★ 園			大正大藏經
恠怪に「アヤシムテ」の右訓送り。 恠は怪の俗字(以下省略)	園恠に「サケム」の右訓。𪛗は號の略字	園焉に「コ」の右訓「ニ」の送り。 園三本俱作及 天注	園佚に「イチ」の右訓。園三本俱作佚 天注	園鵠に「カク」の右訓「ツル」の左訓。 式納鵠の古音鵠に近し	園佚に「イチ」の右訓。園三本俱作佚 天注	園恠に「ウチ」の右訓。「タ、キ」の左訓	園捉に「ウチ」の右訓。「タ、キ」の左訓			備考

								三六六			
6	6	5	5	5	3	3	3	2	10	9	5
郷…郷	冢	命●	衽●	左衽	劣●改行内乃至なし	一改行●改行内乃至なし	異一	異改行●改行外乃至なし	典	縛●	奏
卿…卿	★ 園	命者	衽者	★ 園	★ 園	有47字	★ 園	有61字	曲	縛隠	★ 園
	冢						異●				奏
	×						×				×
	家				有32字(細注)	有48字		有170字			
	同 園				同 園	同 園		同 園			
	同 明 續弘 冢			右衽 續弘 左		同 園 續弘					
園郷に「ケイハ」の右訓・送り。郷に「ケイ」の音無し	園家に「チヨウ」の右訓。園三本俱作家 <small>同天注</small> 。三字とも別意	園命に「ハ」の送り	園衽に「シム反」の右訓「ハ」の送り	<small>弘注</small> 無注	園三本俱無32字	園・園「外論曰…」。園言及有り	園は題目に数字なし	園は十の題目標列。園は園十序文。園言及有り	園典に「テン」の右訓「フミ」の左訓	園・園免縛形に「ヘンハクケイ」の右訓	園案に「シン」の右訓。園明作奏 <small>同天注</small>

				三六七					三六六	定本頁
1	1	1	1	1	10	8	8	7	7	行
疾李耳	從	押	温	家●	哺	緯	首相	右●	龜	定本
疾●耳	縱	師	渦	家子	甫	韓	★ 園	右頗	廉	宋磧砂藏經
										明版大藏經
							首●			高麗版大藏經
							同 園			大正大藏經
	松 園 弘 縱									因広弘明集
園李に「リ」の右訓。園墨「李イ」	園從に「シヨウ・シユ」の右訓。 弘注三本並縱。園墨「從イ」	園押に「ヒトシ」の右訓。因押字為師	園渦に「ヒトシ」の右訓。因押字為渦 武坂東本温に作るは形誤。因温字為	園家に「イエトス」の右訓・送り	園哺に「ホ」の右訓	園緯に「キヲ」の右訓・送り。因緯字為韓。園墨「緯イ」	園首相に「シユシヤウ」の右訓。園三本俱有相字並大注	園右に「三」の送り	園龜に「ソ」の右訓。因書生誤歟	備考

三六八											
1	9	7	6	5	3	3	3	2	2	2	2
措 (手偏)	唯…唯	天下	超	快	出 ●●●●	腋 ●	畫	史伝	撥	耳	替
楷 (木偏)	★ 囙	地下	起	扶	★ 囙	★ 囙	書	史公	檢 (木偏)	聃	嵒
★ 囙					出皆是謬辭	腋而			撥 (手偏)	★ 囙	
					同 囙	同 囙				★ 囙	
×									×		
	唯…惟 囙弘			符 囙弘					同 囙 囙弘 檢	★ 囙 囙弘	
左訓 囙措に「カイ」の右訓「カナウ」の	囙唯に「タ、」の右訓。囙注無注。 忒惟と唯は通用	因三喩の中の文前後に數行の文言有り、併以て之を略す	囙超に「テ」の送り。囙は「チ」にも見える	囙快到「タノシクス」の右訓。囙快字為扶。囙墨「快・符イ」	囙三本俱無四字囙大注。忒内四字あるは衍。囙無指摘	囙腋に「エキヲ」の右訓・送り。囙三本俱無而字囙大注	囙畫に「クワヲ・カクトモ」の右訓・送り「エ」の左訓	囙史に「シニ」の右訓・送り	囙撥に「ハイスルニ」の右訓・送り「スツ」の左訓。囙撥字為檢	囙三本俱作聃囙大注	囙替に「ケイ」の右訓

									三六八	定本頁
8 a	7	6	6	6	4	2	2	2	1	行
騎	咲	遣	匹	瑣	也 改行 ● ● 改行内	間	僣	説	棄義	定本
★ 囙	笑	★ 囙 囙 置 置	正	瑣	有6字	聞	愆	得	★ 囙	宋碩砂藏經
			★ 囙							明版大藏經
		×	×	★ 囙						高麗版大藏經
			★ 囙							大正大藏經
			×	×						
倚 [弘] 騎		同明 [弘]	★ 囙 [弘] 正					★ 囙 [弘]	定 ● ● [弘] ★	因広弘明集
[弘] 三本 騎	囙咲に「ワラフ」の右訓。咲は笑の古字（以下省略）	囙遣に「クキヲ」の右訓送り。囙三本俱作置。[天注]明 置。武内遣は形誤	囙匹に「ヒチ」の右訓「カタシ」の左訓。囙・[天注]・[弘注]とも無注	囙瑣に「サ」の右訓	「内法門有漸頓」の題目。因指摘	囙間に「ニ」の送り	囙僣に「トカ」の右訓。僣は愆の俗字	囙説に「ク」の送り	[弘] 三本 有「棄義」	備考

								三六九			
4	4	3	3	3	3	2	1	1	10	8 b	8 a
怨親是	怨親数	牙	之	未	辯	孰	臣	形	忠所以敬	祭 視歌而孔子時助	而●●●●●弗
怨●是	怨●数	互	多	来	辨	孰	巨	★ 園 困	忠●●敬	● 視●●●●●	而歌孔子助祭弗
					★ 園			刑			
					×			×			
★ 園	★ 園	★ 園						同 明			
★ 園	★ 園	×						同 明			
					★ 園 廣弘 辨						
園三本俱無親字 大注。 因無親字	園親は頭欄外に補記。 園三本俱無親字 大注。 因無親字	園牙に「タカヒニ」の右訓・送り。 牙は互の俗字（以下省略）	園之は右に小さく補記。 園・園之無し。後代の別筆か	園未は右に「タ」「ス」と再読の送り。 因未字為来	園辯に「ワ マエム」の右訓・送り。 園明作辯 大注。 弘注無注	園孰に「タレカ」の右訓・送り。タレは孰。園「ハ」無しとも見える	園臣字為巨	園形に「アラハル」の右訓・送り。 園宋元俱作形。 大注宋 形	園所以は頭欄外に補記。 園・園は所以の字なし。後代の別筆か	園「歌」 ^コ 而孔子時 ^ニ 助祭 ^{タスギテウサヒ} 「」の右訓・送り	因指摘。写誤による次項との交錯か

教行証文類所引『弁正論』諸本校訂

									三六九	定本頁
9	9 b	8 a	8	7	6 b	5 b	5 a	5	5	行
淳	渦也	●須 (細注)	二	流也	志	正	行ゝ志 (注扱い)	己	天	定本
淳	渦●	注須 (二字空)	★ 園	流焉	意	★ 園	(本文扱い)	★ 園	★ 園	宋碩砂藏經
		★ 園 ×						巳 ×	天 ×	明版大藏經
		注須 (行改)	三			止	★ 園			高麗版大藏經
		注須 (注扱い)×	同 園			同 園	★ 園			大正大藏經
★ 園 廣弘 <small>ニ</small> 淳		★ 園					★ 園			因広弘明集
園淳に「テイ」の右訓。 園注無注		因の「注扱い」末尾不明確	園三本俱作 <small>ニ</small> 大注		園墨「志イ」	園正に「キ」の送り。 園三本俱作正 ニ大注	園三本俱作本文 <small>ニ</small> 大注	園己に「コ」の右訓「オノレ」の左 訓	園明作天 <small>ニ</small> 大注	備考

						三七〇					
6	6	4	4	3	3	3	10	10	10	10 b	9 a
威	炎	菟	律	謗	辯●	苻(草冠)	冲	澆	已	回也	●空(細注)
★ 囙	★ 囙	兔	津	訪	辯之	苻(竹冠)	★ 囙	★ 囙	已	回●	注空(二字空)
	猷										★ 囙
	×										×
盛							冲				注空(行改)
同 囙							同 囙		★ 囙		注空(注扱い)×
									×		
								淳	★ 囙		★ 囙
								 碩弘	碩弘 己		
囙威に「ヨソオイ」の左訓。囙二本 俱作威 大注		囙菟に「ト」の右訓	囙律に「ヲ」の送り 囙・囙「リチヲ」の右訓	囙謗に「ソシル」の左訓		囙苻に「カナフ」の右訓。	囙無注。[大注]二本 冲	囙澆に「ケウ」の右訓	囙已に「イ」の右訓。囙・大注・ 弘注とも無注		因の「注扱い」末尾不明確

									三七〇	定本頁
10 b	10 a	10 a	9 b	9 a	9	8	8	8	8	行
風 ●	二月	悉 ●	水	●周 (細注)	欣 ●	變色	●變	懼	浮	定本
風卒	★ 園	悉皆	池	注周 (注扱い)	欣於	變 ●	四變	★ 園	泛	宋碩砂藏經
	正月 ×			★ 園 ×		★ 園 ×				明版大藏經
				注周 (行改)				歡		高麗版大藏經
				×				同 園		大正大藏經
				★ 園	欣其 碩弘	★ 園 碩弘	★ 園 碩弘			因弘明集
	圖明作正 大注		團墨「水イ」	園・因の「注扱い」末尾不明確	粉文体が四六駢儷文（四句六句の対句）であり園は誤りか	園變に「ハンシ」の右訓・送り。元明俱有色字 大注		園懼に「オソル」の右訓。園三本俱作懼 大注	園浮に「ウカフ」の右訓	備考

										三七 一	
9	8	8	7	6	6	5	5	3	2	1	10 b
雅	清	耀	國	已	自漢 靈哉	指 一	二 改行 ●改行 自乃 なし	性	遇	越	木 ●
雅	香	暉	目	已	★ 園	★ 園	(有 301字)	★ 園	過	★ 園	木 摧
					(別位置) ×	指 ● ×	(有 278字) ×				
	★ 園						(有 303字)				
	★ 園	暉 ×		★ 園			同 園				
	★ 園 碩 弘	輝 碩 弘		以 [碩 弘] 已			有 288字 碩 弘	情 碩 弘		超 [碩 弘] 越	
園雅に「キヨウ」の右訓	園三本俱作香 大注	園耀に「ヒカリヲ」の右訓・送り	「園イ」の注記を墨で未消	園國に「二」の送り。園本文「目」、 [弘注] 三本 已	園記述順序交錯。因言及有り。武内 明は恐く後人の改むる所	明は題号に番号無し。園無注。[大注] 明 無二		園性に「ヲ」の送り	園遇に「マウアヘリ」の右訓・送り	園越に「コエテ」の右訓。[弘注] 元明 越	

教行証文類所引『弁正論』諸本校訂

定本頁	三七一	三七二	1	1	1	1	4	6	7	7
行	10	10	1	1	1	1	1	1	1	1
定本	牙	蕭(草冠)	鑄●	宗	模	衆	照	提●異	形於	公
宋磧砂藏經	天	★ 園	鑄而	宋	摸	★ 園 困 多	昭	提之異	★ 園	云
明版大藏經					★ 園 ×					
高麗版大藏經	★ 園	蕭(竹冠)								
大正大藏經	★ 園	同園				多 ×				
因弘明集	★ 園 磧弘				磧弘 模				形● 磧弘	
備考	園牙に「カニ」の右訓「キハ」の左訓・園三本俱作天 大注	園蕭に「サウ」の右訓「ワウナリ」の左訓。大注三本 蕭	園宗に「ソウ」の右訓	園模に「ホ」の右訓「ウツス」の左訓。園・天注・弘注とも無注	園衆に「オ、シ」の右訓。園元明俱作衆 大注	園菩提に「ノ」の送り				

						三七三					
4	4	2	2	1	1	1	9	9	9	9	8
按	● 佛	肅(無冠)	徳之●	行●	● 斷	智則	淤	● 註云(本文扱)	者●●●●●●●●	懷	郭註云
案	於佛	蕭(草冠)	★ 園	★ 園	★ 園	知則	游	● 注云(本文扱)	者皆未悟丘與爾	徳	郭注云
								●●●云(細注)×			
		簫(竹冠)	徳名言	行處	道斷			郭注云(本文扱)	★ 園	★ 園	
		同園	同園	同園	同園			同園	★ 園	★ 園	
										★ 園 續弘	郭注● 續弘
案は「按ニ通ス」(以下省略)	園佛に「ニ」の送り	園肅に「セウ」の右訓。園三本俱作蕭 大注	園三本俱之一字 大注	園三本俱無處字 大注	園三本俱無道字 大注	園智に「ル」の送り	園淤に「オ」の右訓	園明無郭注二字。大注宋無郭、明無郭注	園三本俱有六字 大注	園懷に「コ、ロニ」の右訓・送り。園三本俱作徳 大注	園註に「チウ」の右訓「シルス」の左訓

						三七四			三七三	定本頁
3	3	3	3	3	3	2	9	6	5	行
疾疫	戦	戈	豊●	稔榮	●降●	悪龍無力善龍	悪龍有力則	而	佛流經	定本
疫疾	戢	★ 園	★ 園	穀稔	時降百		★ 園	則	佛經流	宋磧砂藏經
										明版大藏經
							●●有力則		●經流	高麗版大藏經
						悪龍無力善龍×	同園		同園	大正大藏經
★ 園 碩弘		戎 碩弘	豊登 碩弘		時降● 碩弘			★ 園 碩弘		因弘明集
	園戦に「セン」の右訓「タ、カフ」の左訓。因戦字為戢戢叶義歟。園墨「戦イ」	園戈に「クワ」の右訓「ホコ」の左訓	園墨「登イ」	園稔に「ネイ」の右訓「コメ」の左訓。榮に「コク」の右訓	因降上有時一字、ニ云「百穀稔豊」	因無注	園三本俱有悪龍二字 大注	園而に「ニ」の送り	園流に「リウ」の右訓。經に「ヘテ」の右訓。園三本俱有佛字 大注	備考

9	7	7	7	6	6	6	5	5	4	4	3
都也	光●	玄●	大	岳	二天	住●	机	寶●	君	元…元	也
観也	光之	玄之	太	★園	三天	住在	★園	寶玄	若 困 君	無…無	者
				嶽 ×							
									★園		
									★園		
			★園 積弘		★園 積弘		几 積弘		★園 積弘		● 積弘
園都に「ミヤコ」の左訓	園墨「イナシ」			園岳に「カク」の右訓「オカ」の左訓。嶽は岳に同じ（以下省略）	園墨「ニイ」		園机に「キ反」の右訓「ニ」の送り「ツクエ」の左訓		園元明俱作若 大注	園は両者に、園は後者に「クエン」の訓。園墨「元イ」を墨で抹消	園墨「イ無」

定本頁	三七四	三七五	2	2	2	2	2	10	9	行
定本	之中	太	案道	晏	循	而	列● 一乃至	忘	註	朱●
宋磧砂藏經	中之	大	★ 園	★ 園	修	所	(有16字)	妄	注	朱公
明版大藏經										
高麗版大藏經	中上	★ 園	宴 道●							★ 園
大正大藏經	同園	★ 園	宴 ×	同園						★ 園
因広弘明集		★ 園 磧弘	(以下引用無し)							
備考	園三本俱作之 大注。園「イナシ」	園元明俱作大 大注			園案に「スルニ」の送り。園三本俱有案字。大注元明有案字	園案に「シウ」の右訓「ナカシ」の左訓	「檢修靜目中見有經書藥方符圖等合有」の字	園忘に「ミタリニ」の右訓・送り	園註に「シテ」の送り	園朱に「シユヲ」の右訓・送り。園三本俱有公字 大注

教行証文類所引『弁正論』諸本校訂

4	3	3	2	2	2	2	三七七 1	10	三七六 8	定本頁 行
流法	皆●	餘等●	言清●者	少	孝	●強	當若	正故	隔	定本
法流	皆是	餘諸信	言清信者	弱	老	心強	當●	★ 園	革	宋碩砂藏經
										明版大藏經
		餘諸善		★ 園				正●	★ 園	高麗版大藏經
		同 園		★ 園				同 園	★ 園	大正大藏經
										因広弘明集
										備考
										園流に「セヨトナリ」の送り
										園等に「ヒトシク」の右訓・送り。 園三本俱作諸信 <small>大注</small>
										園清に「ト」の送り 園三本俱作弱 <small>大注</small>
										園孝に「カウ」の右訓
										園若に「シ」の送り
										園隔に「ヘタテ、」の右訓・送り。 園三本俱作草字 <small>大注</small>
										園正に「ニ」の送り。故に「ニ」の送り。 園三本俱有故字 <small>大注</small>